児童用英語教材に見られる構文について*

神谷昇
神田外語大学

本稿は児童用英語教材で用いられる「構文」について理論言語学の観点から調査した結果を提示し、その特徴を考察することを目的とする。より具体的には、国内で発行されている4種の教材に出現する「構文」を調査した結果、(i) wh 疑問文や yes/no 疑問文が多用されること、(ii) 時制がほぼ現在に限られること、(iii) can などごく一部の助動詞しか出現しないことが判明した。そして、疑問文が多用されるのは、相手の発話を理解し、英語に慣れ親しみながら相手とのコミュニケーションを図ることを目的としているからであり、さらに、時制が現在に限られるのは、児童が眼前の出来事や自分自身の能力を「現在」に関わりがあるものとして捉え、それを児童自らが発話することでコミュニケーションを図ることができるように設計されているからであると示唆する。

1．はじめに

本稿は、2011年度から小学校で導入されている「外国語活動」（実質的には「英語活動」）においてどのような言語材料、特に「構文」、が使用されているのかについて理論言語学の観点から調査を行った結果を報告するものである。なお、本稿における「構文」とは、いわゆる「文法項目」のことを指す。

以下では、第2節で小学校に「英語活動」が導入されるに

* 本稿は、日本英語学会第28回大会ワークショップ「英語学から見た児童英語」（企画者 神谷昇）における口頭発表（2010年11月13日 於日本大学文理学部キャンパス）を基に加筆・修正したものである。日本英語学会での発表の準備段階で貴重なコメントを下さった長谷川信子先生、長谷部郁子氏、町田なほみ氏に感謝する。また、発表の際に参加者の方々から有益なコメントを頂いたことにも感謝する。言うまでもなく、本稿の誤りは筆者の責任である。なお、本稿の調査は日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（C）『早期英語教育教材に見る語彙と文法の特徴：真に「英語が使える日本人」育成に向けて』（研究代表者：神谷 昇）の助成を受けて行われたものである。

至った背景について簡単に触れ、第３節で「英語活動」でどのような「構文」が使用されているのかについて調査を行った結果を提示する。そして、その結果に基づき、児童英語で使用される「構文」の特徴を理論言語学の観点から考察する。第４節で本稿の内容をまとめる。

２.「外国語活動」導入の背景

本節では、「外国語活動」が小学校に導入されるまでの経緯について概観する。具体的には学校教育の内容などを定めた学習指導要領の変遷とそれに伴う「英語活動」の位置づけの変化を述べ、その後、小学校「英語活動」で使用されている語彙の研究について触れる。

1998年に公示され、2002年４月から施行された学習指導要領に基づき小学校では、「総合的な学習」と呼ばれる時間が設定され、その中の国際理解の一環として英語活動が実施されてきた。このような「従来型の英語活動」は97.1%の小学校で、また、平均すると６年生では毎月約１回（年平均で15.9時間）の割合で実施されてきた。ただし、従来型の英語活動の大半では学級担任が英語活動の指導に当たる割合が全体の94.0%を占め、また、内容も学校の自由裁量であるために、歌やゲームなどを通して英語に触れるというものが多かった。（以上の内容は文部科学省「『小学校英語活動実施状況調査（平成19年度）』の主な結果概要（小学校）」による。）

さらに、小学校「英語活動」を円滑に実施するための教材も様々な会社から発行されてきた。以下の５種はその一例である。

Let's Have Fun! （開隆堂）
Junior Columbus 21 （光村図書出版）
Junior Horizon （東京書籍）
One World Kids （教育出版）
Kids Crown （三省堂）

しかし、学習指導要領が2008年に改訂されたことに伴い、2011年度から小学校で「外国語活動」が小学校の5、6年生を対象として「正課として」実施されることとなった。ただし、外国語活動では原則として「英語を扱う」とされていることから、実質的には「英語活動」とみなすことができる。なお、英語活動は国語や算数などの教科とは異なり、教員が児童の英語活動の内容などを評価することはしない。また、学習指導要領によれば、小学校の英語活動の目標はあくまでも「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」や、「コミュニケーション能力の素地を養う」ことにあり、最終的には英語それ自体の学習や習得を目指す中学校や高等学校での英語教育とは異なる位置づけがなされていることに注意しなければならない。

このように2011年度から正課としての「英語活動」が小学校に導入されることになり、それを円滑に実施する為に文部科学省は2009年に『英語ノート』を制作、配布した（なお、『英語ノート』はbook 1とbook 2の2冊（およびその指導資料）から構成されている)。『英語ノート』は「教科書」ではなく、「教材」と位置づけられており、各学校が必ずしも英語活動で使用する必要はない。しかしながら、文部科学省が推奨する教材であり、電子黒板とともに使えるソフトが配布されたこともあり、現実には多くの学校で使用されていると考えられる。

『英語ノート』が発行されたことにより、「英語活動」で扱

う内容についての一定の目安は示されたといえるが、それでもなお、「英語活動」でそもそもどのような内容や語彙を扱うべきであるのか、あるいは扱わなければならないのか、などの詳細については、学習指導要領に以下のようないくつかの例が掲載されている程度にすぎず、依然として不明なままである。

(1) あいさつ

A: Hello. How are you?

B: I'm fine, thank you.

(2) 自己紹介

Hi, my name is Taro. I like sushi. I don't like tennis.

(3) 道案内

A: Where is the post office?

B: Go straight. Turn left / right.

（上記(1)-(3)の例は『小学校学習指導要領解説外国語活動編』 pp. 25 - 26 より）

しかも、これらは挨拶や自己紹介などのような場面やタスクに関わるものとして掲載され、文法よりも単語や常に一定の形で用いられる「定型表現」が重視されていることが明らかである。これに対して中学校の英語では文法項目、例えば以下にあるような平叙文や命令文をも指導することが学習指導要領により定められている。

(4) 肯定及び否定の平叙文

Bill has three cats.

Emi doesn't like baseball.

(5) 肯定及び否定の命令文

Walk slowly, please.

Don't run here.

（上記の例はいずれも『中学校学習指導要領解説外国語編』 p. 43 より）

ここまでをまとめると、小学校の「英語活動」は中学校以降の英語とは異なり、あくまでもコミュニケーションを英語で図ることを目的としているためにコミュニケーションの内容、あるいは文の「機能」とでも言うべき点が重視され、英語活動に適当な単語や構文のような言語材料の詳細は依然として不明なままであると言える。

このような、児童英語で扱うべき具体的な言語材料の欠如という状況を受け、学習指導要領の改訂前から「英語活動」で扱う語彙についてさかんに議論されてきた。語彙の研究が多くなされてきたのは、小学校の「英語活動」ではタスクやそれに関係する語彙が重視される点にある。例えば、中條・西垣・西岡・山崎・白井(2006)では、以下にあげる国内中学校英語検定教科書会社が発行する児童英語教育用教材 5 種について、それらに出現する語を特定し、そのリストを公表した。

Let's Have Fun! （開隆堂）
Junior Columbus 21 （光村図書出版）
Junior Horizon （東京書籍）
One World Kids （教育出版）
Kids Crown （三省堂）

より具体的には、中條・西垣・西岡・山崎・白井は、上記 5 種の教材に出現する約 1300 語を抽出し、各単語について何種類の教材に「重複して」出現したかを算出し、それを「レン

ジ」という数値で表現した。例えば、冠詞の a や、前置詞の about は 5 種の教材すべてに出現したので、レンジは「５」となる。同様に、actor や air などは 3 種の教材に出現したのでレンジは「３」である。

この他に、石川(2006)と神田外語大学が作成した語彙リスト（詳細は長谷川・町田(2010)を参照）も語彙に関する先行研究としてあげることができる。石川は、児童の言語活動に必要な語彙を英語ばかりでなく日本語からも収集し、コーパス言語学の手法を用いておよそ 1850 語を選定した。また、神田外語大学では、世界的に広く流通している子供用 EFL 教材である *Let's go* と *Super kids* に出現する語を元にしつつ、中條・西垣・西岡・山崎・白井(2006)の語彙リストや石川の語彙リストも参照し、およそ 500 語の内容語とおよそ 100 語の機能語を抽出した。

このように、小学校「英語活動」の言語材料の研究は語彙を中心に進み、中條・西垣・西岡・山崎・白井(2006)、石川(2006)、長谷川・町田 (2010)はどれも「英語活動」で扱う単語を明らかにしたという点で重要なものである。しかし、実際の「英語活動」では(1)-(3)の例に示したように「文」を用いてコミュニケーションを行うことも期待されていることから、「英語活動」で必要な語彙を選定するだけでは不十分であり、どのような「文」（または「構文」）が必要とされているのかまでをも特定する必要があるように思われる。以下ではこのような状況を踏まえて行った「英語活動」で使用される「構文」についての調査結果を報告する。

３．児童英語教育教材で用いられる「構文」について

本節では、前節で概観した内容を踏まえ、実際の「英語活動」で使用される文について生成文法の観点から調査した結果を報告する。より具体的には、はじめに調査項目と調査手順に

ついて述べ、次に調査結果を提示する。そして、調査結果を踏まえて「英語活動」で使用される「構文」について考察を行う。

3.1. 調査項目

はじめに、本稿の調査項目について述べる。本稿では、以下の2点について調査を行った。

(6) 調査項目

1. 児童英語で頻出する「構文」（あるいは文型や発話行為）にはどのようなものがあるのか。
2. そのような「構文」の特徴とはどのようなものであるのか。

調査の対象とした「構文」は、相手とのコミュニケーションの際に多く使用される構文（生成文法における「CP領域」が関わる文；詳しくは後述）と、時制や相、態などに関わる構文（生成文法における「TP領域」が関わる文；詳しくは後述）とに分類して調査を行った。前者には「wh疑問文」、「yes/no疑問文」などが含まれ、後者には、「不定詞補文」、現在・過去のような「時制」、「受動態」、「完了形」、「助動詞」が含まれる。具体的な例は(7)と(8)を参照されたい。

(7) 相手とのコミュニケーションの際に使用される「構文」（いわゆるCP領域が関与する「構文」）の例

a. *Are* you ready?（be動詞を用いたyes/no疑問文）
b. *Do* you have a pen?（一般動詞のyes/no疑問文）
c. *What's* this?（wh疑問文）

(8) 時制、相、態などが関わる「構文」（いわゆるTP領域が関与する「構文」）の例

a. I want *to be a doctor*.（不定詞補文）
b. I *am* a student.（時制：現在）

c.　I *was* a student.（時制：過去）

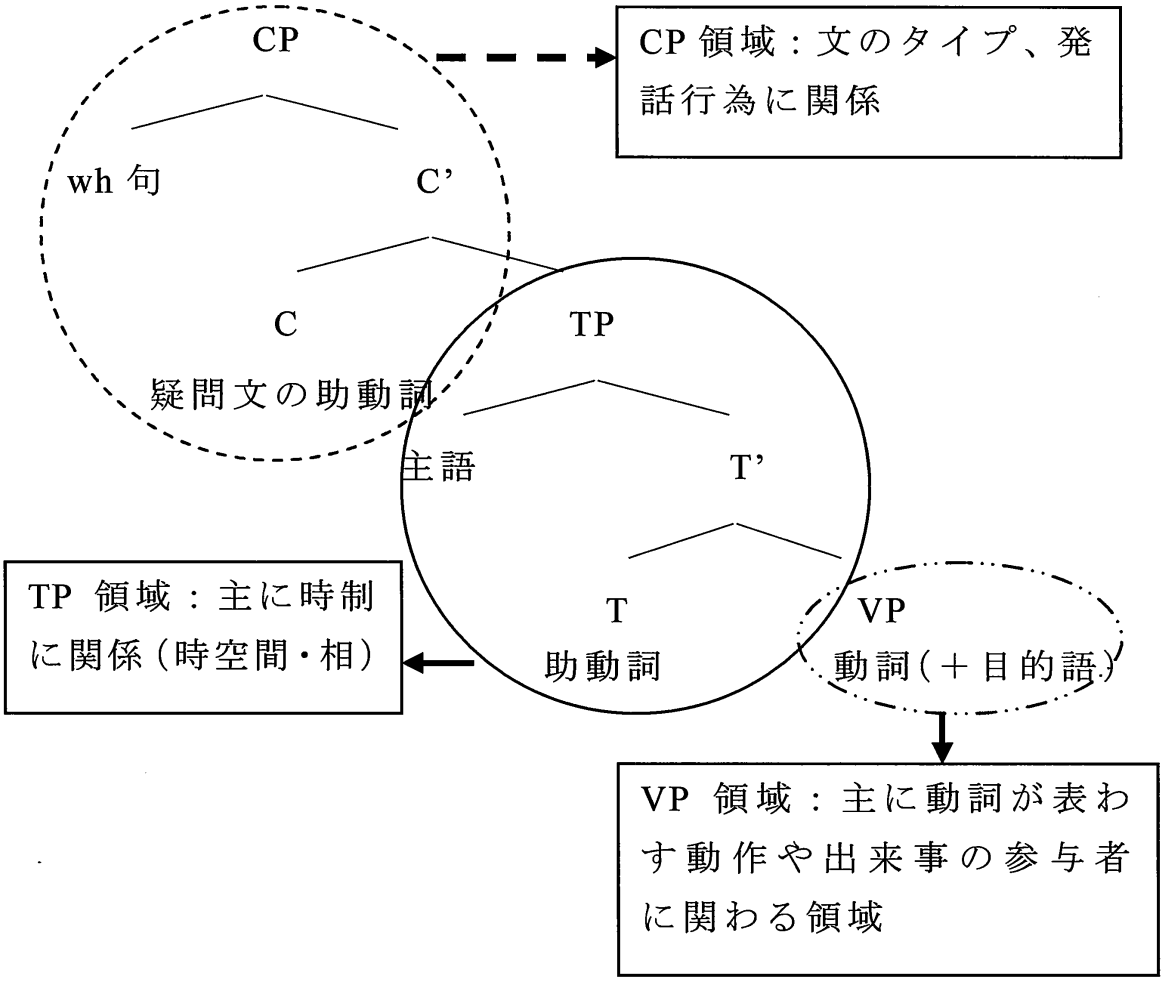
d.　John *was hit* (by Mary).（受動態）

e.　I *have been* to America.（完了形）

f.　I *can* swim.（助動詞）

(7)と(8)で述べたように、本稿では文を「CP 領域」と「TP 領域」が関与する構文とに分類するが、これは、本稿が(9)に描かれているような生成文法で仮定されている文の構造を想定して調査を行ったことによる。

(9) 文の構造：CP 領域＋TP 領域＋VP 領域

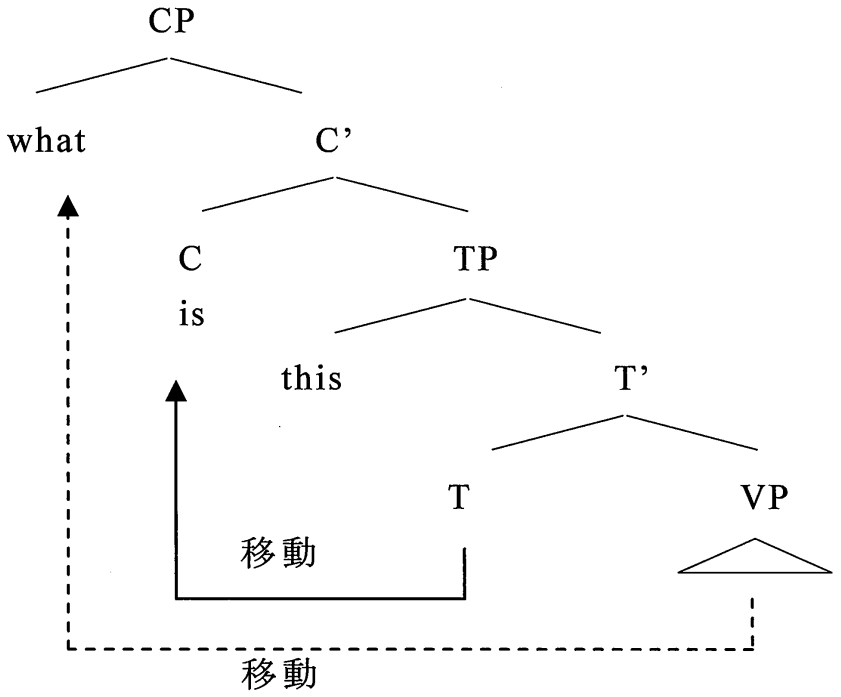


(9)にあるように、CP 領域は文のタイプ（疑問文や命令文など）や発話行為に関係し、構造上、最上位に位置することか

ら、「文頭の領域」で、かつ、「コミュニケーションに関係する領域」であると言える。したがって、(7)のような疑問文は相手との情報交換を目的とする文であるので、この領域が関与する構文であると考えられる。(9)の構造に従うと、例えば、(7c)には(10b)のような構造が与えられ、この構造においては what が CP の指定部に、is の短縮形の's が C に、this が TP 指定部にある。

(10) a. What's this? (=(7c))

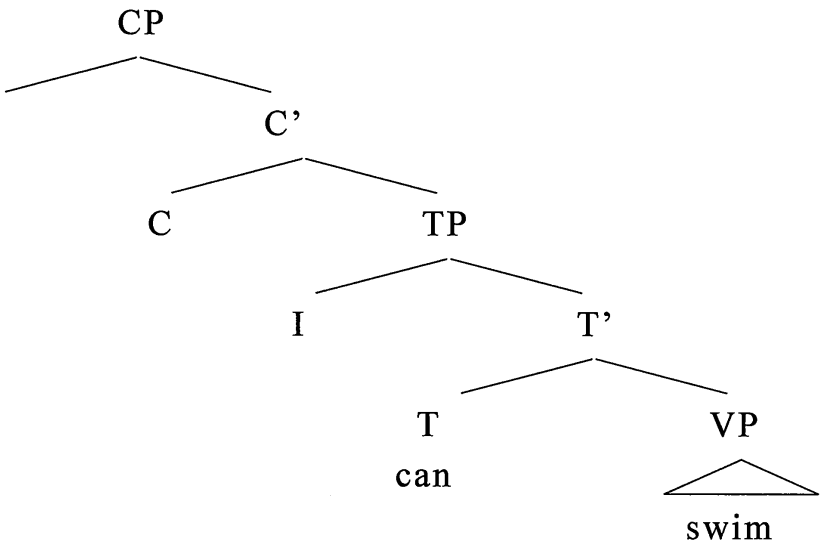
b.



また、(9)に示されているように、TP 領域は文の時制（現在・過去）や相（進行相・完了相）に関わり、また助動詞が生起する領域でもある。したがって、例えば(8f)は(11b)のような構造を持つと考えられ、この構造においては助動詞の can が T に生起する。

(11) a.　I can swim. (=(8f))

b.



なお、(9)の VP 領域の構文については本稿では分析の対象とはしなかった。詳細は長谷部(2012)を参照されたい。以下では、上記の文の構造を踏まえて調査を行った結果を提示する。

3.2. 調査手法

次に調査手法について述べる。本稿では中條・西垣・西岡・山崎・白井(2006)の児童英語教育教材に出現する語彙の調査で採用された手法を援用し、入手可能な児童英語教育用教材（具体的には(12)に示す教材）について、掲載されている英文を電子化した上で、各教材に共通して出現し、児童が使用あるいは理解することを期待されている「構文」を抽出した。そして、どの構文が何種の教材に出現するのかを「重複度」、つまり、「レンジ」という基準で数値化した。この基準を用いると、レンジが高いものほど多くの教材で使用されている項目であるといえる。

(12) 調査対象とした教材

・『英語ノート』(文部科学省)
book 1・2の英文、および、「指導資料」中のCDスクリプト、扱う表現、および、教案中の児童の活動
(略称:「ノート」)

・*Junior Columbus 21*(光村図書出版)
book 1・2の英文、および、CDスクリプト
(略称:「JC21」)

・*Let's Have Fun!*(開隆堂)
book 1〜6の英文
(略称:「LHF」)

・*One World Kids*(教育出版)
アントコース、バードコースの英文、および、それぞれのコースの指導書(赤)の英文
(略称:「OWK」)

3.3. 調査結果

本節では上記の手順を踏まえて行った調査結果を提示する。はじめに、CP領域が関与する「構文」の1つである疑問文の調査結果が表1に示されているが、この表の構成は以下のようになる。まず、左端にある「項目」とは、調査対象とした構文の名称を表わす。例えば、表1の場合、「項目」に「疑問文」とあるので、疑問文についての調査結果が示されていることになる。次に、その隣の「大分類」と「小分類」であるが、これらは調査対象とした構文の下位分類を表わしている。例えば、表1では、上から1行目と2行目はbe動詞の疑問文の中で、現在形の疑問文と過去形の疑問文の調査結果が提示されていることを意味する。また、「レンジ」は上述したように、ある表現が何種の教材に使用されているのかを表わす数値で、本稿では4種類の教材を対象としたので、最大値は4

である。最後に右端の「例文」は、教材に出現した実際の文を示す。以上を踏まえて表1を概観すると、be動詞の現在形やdoまたはdoesを用いた疑問文は「レンジ」の数値が高く、したがって、多くの教材に出現することが分かる。その一方で、be動詞の過去形やdidを用いた疑問文は児童英語教材にはほとんど出現しないことが明らかとなった。また、wh疑問文（疑問詞疑問文）については、what, who, where, how, whenを用いたものは比較的多くの教材に出現するのに対して、which, whoseで始まる疑問文のレンジは低く、whyを使う疑問文にいたってはどの教材でも出現しないことが判明した。（なお、どの教材にどの「構文」が出現したのかの詳細については本稿末尾の付表1を参照のこと。）

表 1：相手とのコミュニケーションを図る際に用いる「構文」（いわゆる CP 領域が関与する「構文」）の調査結果

項目	大分類	小分類	レンジ	備考	例文（イタリックは筆者による）
疑問文	be 動詞	現在	4	・wh 疑問文も含む ・進行形疑問文も含む	Grandpa: *Are* you ready? （「ノート」2、CD スクリプト）
		過去	1		*Was* he or she a writer or cartoonist? （JC21 bk 2, CD スクリプト）
	一般動詞（現在）	Do ～?	4	wh 疑問文も含む	*Do* you like soccer?（「ノート」1、扱う表現）
		Does ～?	3		How many colors *does* this flag have? （JC21 bk 2, CD スクリプト）
	一般動詞（過去）	Did ～?	1		What *did* he do?（JC21 bk 2, CD スクリプト）
	wh 句（疑問詞）	what	4		*What*'s this?（「ノート」2、CD スクリプト）
		who	4		*Who* am I?（「ノート」2、CD スクリプト）
		where	4		*Where* is the station?（「ノート」2、CD スクリプト）
		how	4		*How* do you go to Kyoto?（JC21 bk 2, 本文）
		when	3		*When* is your birthday?（「ノート」2、扱う表現）
		which	2		*Which* do you like the best?（JC21 bk 1, 本文）
		whose	1		*Whose* bag is this?　（LHF bk 4, 本文）
		why	0		（該当例なし）

注）bk とは book を表わす。例えば「bk 1」はその教材の「book 1」から引用した文であることを意味する。

次に、時制や相、態に関わる項目（TP 領域が関与すると考えられる「構文」）の調査結果を示す。詳しくは表２および表３に示すとおりであるが、疑問文についての調査結果と同様に、多くの教材で使用されている項目とそうでない項目があることが判明した。例えば表２に提示するように、不定詞については名詞的用法はすべての教材で使用されているのに対して、副詞的用法や形容詞的用法の不定詞が出現する教材の数は少ない。また、be 動詞の時制に関しては、原型の be や現在形の am, are, is はすべての教材に用いられているのに対し、was や were の出現する教材は数が限られていることが判明した。さらに、受動態についてもそれが出現する教材は 1 つしかないことが明らかになった。(なお、どの教材にどの「構文」が出現したのかの詳細については本稿末尾の付表２を参照のこと。)

表２：時制、相、態が関わる「構文」（TP 領域が関わる「構文」）の調査結果（その１）

項目	大分類	小分類	レンジ	例文（イタリックは筆者による）
不定詞	名詞的用法		4	I want *to go to Italy*.（「ノート」2、CD スクリプト）
	副詞的用法		2	I'm glad *to meet you*.(LHF bk 3, 本文)
	形容詞的用法		2	Please buy me something *to eat*.（LHF bk 6, 本文）
時制	be 動詞（原型）	be	4	I want to *be* a teacher.（「ノート」2、扱う表現）
	be 動詞（現在）	am	4	I'*m* happy. （「ノート」1、CD スクリプト）
		are	4	Sushi and sukiyaki *are* from Japan.（「ノート」1、CD スクリプト）
		is	4	My name *is* Ken.（「ノート」1、CD スクリプト）
	be 動詞（過去）	was	2	Beethoven *was* a composer.（JC21 bk 2, CD スクリプト）
		were	1	When *were* they?（JC21 bk 2, CD スクリプト）
受動態			1	Bread *is made* from wheat.（JC21 bk 2, CD スクリプト）

また、表２に示す項目と同様に、助動詞についても多くの教材で使用されているものとそうでないものがあることが判明した。具体的には、表３から明らかなように、can, will, would は多くの教材で使用されているのに対して、may は２種の教材でしか使用されていない。さらに、完了の have, have to, must, shall についてはそれぞれ１種の教材でのみ使用されていた。そして、be going to, could, might, 助動詞の need, ought, should については調査対象とした教材には出現していないことが判明した。[1]（なお、どの教材にどの「構文」が出現したのかの詳細については本稿末尾の付表３を参照のこと。）

[1] ただし、町田(2010)で指摘されているように、海外の児童英語教育教材には be going to, could, might, need, should は出現する。なお、ought については国内、海外を問わず、どの教材にもこの語は出現していない。

表３：時制、相、態が関わる「構文」（TP 領域が関わる構文）の調査結果（その２）

項目	大分類	小分類	レンジ	備考	例文（イタリックは筆者による）
時制	助動詞	can	4		I *can* swim.（「ノート」2、扱う表現）
		will	3		I'*ll* shut the door.（LHF bk 6，本文）
		would	3		*Would* you like this?（LHF bk 4，本文）
		may	2		*May* I ask you some questions, please?（LHF bk 6，本文）
		have	1	完了形	*Have* you ever played kendama?（LHF bk 6，本文）
		have to	1		If you hit the side of the game board, you *have to* stop and wait.（JC21 bk 1, CD スクリプト）
		must	1		As God has shown us by turning stones to bread, so we all *must* lend a helping hand.（LHF bk 6，本文）
		shall	1		Where *shall* we go?（LHF bk 5，本文）
		be going to	0		（該当例なし）
		could	0		（該当例なし）
		might	0		（該当例なし）
		need	0		（該当例なし）
		should	0		（該当例なし）
		ought	0		（該当例なし）

3.4. 考察

最後に、前節での調査結果を踏まえて、児童の英語に見られる「構文」の特徴について考察する。まず、相手とのコミュニケーションを図る際に使用する「CP 領域」の文については、前節の調査結果で明らかになったように、疑問文が多くの教材で出現しているが、“What's this?” に代表されるような CD の音声を聞いてそれに対して児童が答えることを想定している例文が多く、発話行為の中でも、コミュニケーションの基本である「質疑応答」に適正に応答するタスクに重点が置かれているように思われる。また、このような問いかけの疑問文の「パターン」も多くの場合、一定しているようにも思われる。

次に時制や相、態が関与する「TP 領域」の文で特徴的なことは、児童が使用・理解することを期待されている文の時制は「現在」に限定されるということである。また、受動態がほとんどの教材で出現しない理由については、この構文には目的語位置から主語位置への名詞句の「移動」が関与していると生成文法では考えられているが、その移動自体が児童の受動態の「理解」、あるいは「産出」を難しくしているものと推測される。

4. まとめ

本稿では、児童英語教材で使用される児童の文の特徴について調査を行い、児童英語教材では wh 疑問文や yes/no 疑問文が多用されること、時制が現在に限られること、can などのごく限られた種類の助動詞しか出現しないことを明らかにした。その上で、疑問文が多用される理由については、相手の発話、例えば質問など、を理解し、英語に慣れ親しみながら相手とのコミュニケーションを図ることを目的としているからであると示唆した。さらに、時制が現在に限られているこ

とから、児童が眼前の出来事や自分自身の能力を「現在」に関わりがあるものとして捉え、それを児童自らが発話することでコミュニケーションを図ることができるように設計されていると推測した。

最後に、「児童英語」全体を見たときに、指導者が英語活動で使用する英語と、児童が「英語活動」で使用する英語の違いがどのように捉えられるかについて、推測を述べる。3 節で提示した疑問文や命令文のような発話行為は、児童より主に指導者が行うと考えられる。したがって、指導者の英文にはこのような「構文」が児童の英文よりも多く出現することが推測される。その一方で、児童の活動の中心は自分自身や眼前事象を描写することにあるので、疑問文のような文頭の領域（(9)の図の「CP 領域」）を使用する英文は指導者よりも数や種類が少なくなると考えられる。この見方が正しいとするならば、児童英語で使用される英語を概観したときに、指導者の発話では文頭の領域（(9)の図の「CP 領域」）が豊かな構造を持つ一方で、児童の発話では、時制が現在に限られた単純な構造のみを持ち、かつ動詞を中心とする領域（(9)の図の「VP 領域」）でも単純な構造が好まれると考えられる（後者については長谷部(2012)を参照）。この推測が正しいものであるかどうかについては今後の検討課題としたい。

参考文献

中條清美・西垣知佳子 西岡菜穂子・山崎淳史・白井篤義(2006)「小学校英語活動用テキストの語彙」、『日本大学生産工学部研究報告 B』39、79 – 109、日本大学.

長谷部郁子(2012)「児童用英語テキストにおける動詞の項構造と文型」、*Scientific Approaches to Language* 11、神田外語大学

言語科学研究センター.（本号に収録）
長谷川信子・町田なほみ(2010)「児童英語の語彙リスト—『KUIS 語彙リスト 500』の開発過程とその全容」、*Scientific Approaches to Language* 9, 149 – 190、神田外語大学言語科学研究センター.
石川慎一郎(2006)「KUBEE1850」、神戸大学.
http://language.sakura.ne.jp/s/kubee.html
町田なほみ(2010)「児童英語教育で扱われる機能語」、日本英語学会第 28 回大会ワークショップ「英語学から見た児童英語」（於日本大学文理学部キャンパス）での口頭発表、2010 年 11 月 13 日.
文部科学省 (n.d.) 「『小学校英語活動実施状況調査（平成 19 年度）』の主な結果概要（小学校）」、
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/03/08031920/001.htm

付表

以下の表は、どの教材でどの「構文」が使用されているかを示すものである。

注

1．以下の付表で、該当する項目を含む文が出現した教材には○が付してある。例えば、疑問詞 when を用いた疑問文（付表 1、上から 10 行目）については、『英語ノート』、*Junior Columbus 21*、および、*Let's Have Fun!*の各欄に○が付されているので、それら 3 種の教材に出現したことがわかる。
2．空欄は、その項目を含む文が使用されていなかったことを示す。

3．「レンジ」は何種の教材に出現したのかを表わす数値（つまり「重複度」）である（第3節を参照）。

4．教材略称

「ノート」:『英語ノート』

「JC21」: *Junior Columbus 21*

「LHF」: *Let's Have Fun!*

「OWK」: *One World Kids*

付表 1：相手とのコミュニケーションを図る際に用いる「構文」（いわゆる CP 領域が関与する「構文」）

項目	大分類	小分類	ノート	JC21	LHF	OWK	レンジ
疑問文	be 動詞	現在	○	○	○	○	4
		過去		○			1
	一般動詞	Do ～?	○	○	○	○	4
		Does ～?		○	○	○	3
		Did ～?		○			1
	wh 句（疑問詞）	what	○	○	○	○	4
		who	○	○	○	○	4
		where	○	○	○	○	4
		how	○	○	○	○	4
		when	○	○	○		3
		which		○	○		2
		whose			○		1
		why					0

付表 2：不定詞、be 動詞の時制、受動態（TP 領域その 1）

項目	大分類	小分類	ノート	JC21	LHF	OWK	レンジ
to 不定詞	名詞用法		○	○	○	○	4
	副詞用法			○	○		2
	形容詞用法			○	○		2
時制	be 動詞（原型）	be	○	○	○	○	4
	be 動詞（現在形）	am	○	○	○	○	4
		are	○	○	○	○	4
		is	○	○	○	○	4
	be 動詞（過去形）	was		○	○		2
		were		○			1
受動態				○			1

付表 2 の注）

One World Kids には I'm finished.という表現が出現するが、本稿ではそれを受動態としてではなく、完了形（つまり、動作がまさに終わったところであることを示す文）であると捉えたので OWK の受動態の欄は空欄としてある。

付表 3：助動詞（TP 領域その２）

項目	大分類	小分類	ノート	JC21	LHF	OWK	レンジ
時制	助動詞	can	○	○	○	○	4
		will		○	○	○	3
		would	○		○	○	3
		may			○	○	2
		have（完了形）			○		1
		have to		○			1
		must			○		1
		shall			○		1
		be going to					0
		could					0
		might					0
		need					0
		should					0
		ought					0

261-0014
千葉市美浜区若葉 1-4-1
神田外語大学
言語科学研究センター
nkamiya@kanda.kuis.ac.jp